フィルハーモニア ブラス・アンサンブル

2017年5月19日(金) 19:00開演
第一生命ホール

7:00p.m. Friday, May 19, 2017 at Dai-ichi Seimei Hall

主催：JAPAN ARTS ジャパン・アーツ

後援：一般社団法人 全日本吹奏楽連盟

Program

第 1 部

W.バード：	オックスフォード伯爵の行進曲	*W. Byrd:*	*The Earl of Oxford's March*
J.ブル：	パヴァーヌ	*J. Bull:*	*Pavane*
J.ブル：	王の狩のジーグ	*J. Bull:*	*The King's Hunting Jig*
G.ガブリエリ：	ピアノとフォルテのソナタ	*G. Gabrieli:*	*Sonata pian'e forte*
M.ラヴェル：	亡き王女のためのパヴァーヌ	*M. Ravel:*	*Pavane pour une infante défunte*
J.ケッツァー：	ブラス・シンフォニー	*J. Koetsier:*	*Brass Symphony*
	アレグロ		*Allegro*
	ラルゲット		*Larghetto*
	ロンド、プレスト		*Rondo. Presto*

第 2 部

P.デュカス：	舞踏劇「ラ・ペリ」より "ファンファーレ"	*P. Dukas:*	*Fanfare from "La Peri"*
J.パーカー：	組曲「ニューヨークのロンドンっ子」より	*J. Parker:*	*A Londoner in New York, Suite*
	ハーレム街の響き		*Echoes of Harlem*
	クライスラー・ビル		*Chrysler Building*
	グランド・セントラル駅		*Grand Central*
C.ヘイゼル：	3匹の猫	*C. Hazell:*	*Brass Cats*
	ブラック・サム		*Black Sam*
	バーリッジ		*Borage*
	ミスター・ジャムス		*Mr. Jums*
C.ヘイゼル：	もう1匹の猫〜クラーケン	*C. Hazell:*	*Another Cat — Kraken*
J.カンダー：	ミュージカル「シカゴ」より	*J. Kander:*	*Chicago*
	序曲		*Overture*
	オール・ザット・ジャズ		*All That Jazz*
	ロキシー		*Roxie*
	ホエン・ユーアー・グッド・トゥ・ママ		*When Your're Good to Mama*
	ウィ・ボース・リーチド・フォア・ザ・ガン		*We Both Reached for the Gun*

Profile

フィルハーモニア・ブラス・アンサンブル *Philharmonia Brass Ensemble*

英国の名門フィルハーモニア管弦楽団の金管セクションのメンバーを中心に構成されたブラス・アンサンブル。フィルハーモニア管の金管セクションには、ホルンのデニス・ブレイン、トランペットのフィリップ・ジョーンズ、ジョン・ウォーレス、デヴィッド・メイソン（ビートルズの「ペニー・レイン」で登場するピッコロ・トランペットは彼の演奏）等の世界的な名演奏家が在籍してきた。現在の同オーケストラの金管セクションも、オーケストラが持つ偉大な才能の遺産に誇りを持ち、最高の演奏水準を維持するとともに活発なアンサンブル活動を行っている。近年はロイヤル・フェスティヴァル・ホールにおける公演（共演：ホーカン・ハーデンベルガー）、ジョン・ウォーレスの指揮によるシンフォニック・ブラス・コンサートシリーズの他、スイスでも公演を行っている。

ジェイソン・エヴァンス（トランペット／フィルハーモニア管弦楽団首席奏者）
Jason Evans, Principal Trumpeter of Philharmonia Orchestra

英国のオーケストラにおける最も若い首席トランペット奏者。マン島出身。王立音楽院（アカデミー）を首席で卒業し、フィルハーモニア管入団前に、BBC響とボーンマス響からも首席奏者としてオファーを受ける。ロンドン・フィル、ロンドン・シンフォニエッタ、ロイヤル・フィル等の首席客演奏者として、欧米、アジアツアーの経験を持ち、2014年からは王立音楽院で教鞭も執っている。

アリステアー・マッキー（トランペット／フィルハーモニア管弦楽団首席奏者）
Alistair Mackie, Principal Trumpeter of Philharmonia Orchestra

1996年フィルハーモニア管入団。スコットランドのエアーシア出身。英国、フランス、スイス等でリサイタルを行い、ソリストとして、フィルハーモニア管、ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズ、ノルウェー放送響等と共演。グラインドボーン音楽祭のオーケストラ等でも首席奏者を務めている。

マーク・カルダー（トランペット）
Mark Calder, Trumpet

スコットランドのインヴァネス出身。王立スコットランド音楽院を卒業後、バーミンガム王立バレエ管、ボーンマス・シンフォニエッタの第1トランペット奏者を歴任。フリーランスとしても数々の経験を積んだ後、1999年フィルハーモニア管に入団した。

ロバート・ファーレイ（トランペット）
Robert Farley, Trumpet

王立音楽大学（カレッジ）に学ぶ。ハノーヴァー・バンドの首席奏者、シュトゥットガルト・バロック・オーケストラの首席客演奏者を務め、エイジ・オブ・インライトゥメント管やエンシェント室内管とも共演。現在はフリーランスとして活躍し、フィルハーモニア管、バーミンガム市響、ロンドン・シンフォニエッタ等に出演している。

Profile

ジョナサン・マロニー (ホルン)
Jonathan Maloney, Horn

グラスゴーで育ち、王立ノーザン音楽大学やパリ、ライプツィヒ等で学ぶ。卒業後はサウスバンク・シンフォニアに短期間所属したが、王立音楽大学(カレッジ)で学んで以来、フリーランスとして国内の多くのオーケストラで活動。2016年11月にはフィルハーモニア管のホルン・パートの臨時メンバーとなった。

バイロン・フルチャー (トロンボーン／フィルハーモニア管弦楽団首席奏者)
Byron Fulcher, Principal Trombonist of Philharmonia Orchestra

フィルハーモニア管及びロンドン・シンフォニエッタの首席トロンボーン奏者。2012年のBBCプロムスにおけるベリオの「セクエンツァV」でソロ・デビュー。以後数々の新作の初演に携わっている。ヨーロッパ室内管の客演奏者としても活躍。現在ロンドン・ブラスのメンバーであり、王立音楽大学(カレッジ)で教鞭も執っている。

フィリップ・ホワイト (トロンボーン)
Philip White, Trombone

ロイヤル・フィルの奏者を経て、2010年フィルハーモニア管に入団。それ以前に、フリーランスとして、ロンドン響、BBC響、バーミンガム市響等、英国の多くの著名オーケストラで演奏した経験を持つ。また、トリニティ音楽大学でトロンボーンおよび金管楽器による室内楽の教鞭もとっている。

リチャード・ワトキン (トロンボーン)
Richard Watkin, Trombone

ロンドンのギルドホール音楽演劇学校に学ぶ。スコティッシュ・オペラ管の首席トロンボーン奏者を務めた後、ロンドンでフリーランスとして活動。フィルハーモニア管、BBC響、バーミンガム市響等、国内の多くの主要オーケストラに出演している。

ポール・ミルナー (バス・トロンボーン)
Paul Milner, Bass Trombone

スコットランドのエディンバラ出身。マンチェスターの王立ノーザン音楽院で学び、ディプロマを取得。フリーランスの奏者、オペラ・ノース管の奏者を経て、2007年よりロンドン響の首席バス・トロンボーン奏者を務めている。

ピーター・スミス (テューバ／フィルハーモニア管弦楽団首席奏者)
Peter Smith, Principal tubist of Philharmonia Orchestra

王立音楽院(アカデミー)でP.ハリルドとO.マーシャルに師事。フリーランスの奏者として、ロンドン響、ロイヤル・フィル、BBCスコティッシュ響、ロンドン・ブラス等で演奏し、2008年よりフィルハーモニア管の奏者を務めている。

Program Notes

柴田 克彦(音楽評論家)
Katsuhiko Shibata

W.バード：オックスフォード伯爵の行進曲

本日は、“ブラスの神様”フィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブル(PJBE)ゆかりの作品が多く並んでいる。

ウィリアム・バード(1543−1623)は、エリザベス朝時代のイギリス最大の作曲家で、本作は、1581〜91年頃に書かれたヴァージナル(チェンバロに似た小型の鍵盤楽器)のための曲集「戦い」中の1曲。PJBEのメイン編曲者エルガー・ハワースは、「戦い」全体を編曲しているが、この曲は単独でスタンダード化した。PJBEのトレードマーク的な意味合いが強い、壮麗で堂々たるナンバー。

J.ブル：パヴァーヌ／王の狩のジーグ

ジョン・ブル(1562年頃−1628)も、やはりエリザベス朝時代を代表するイギリスの作曲家。この2曲は、同時期の様々な作曲家の作品を集めた「フィッツウィリアム・ヴァージナル曲集」に収められている。

「パヴァーヌ」は、柔らかくゆったりとした音楽だが、細かな動きがさりげなく交わる。なおパヴァーヌは、イタリア起源の緩やかな宮廷舞曲。

「王の狩のジーグ」は、獲物を追う犬や馬上のハンターを描いた華麗な1曲。原題の「Jig(ジグ)」は、イギリス起源の活気溢れる踊りで、フランスに移って「ジーグ」となった。

G.ガブリエリ：ピアノとフォルテのソナタ

ジョヴァンニ・ガブリエリ(1554年頃−1612)は、ルネサンスからバロックへの移行期におけるイタリアの重要作曲家。生地ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の構造を生かした、左右で応唱する声楽・器楽音楽を創造し、多くの作品がブラス・アンサンブルの基本レパートリーにもなっている。

「サクラ・シンフォニア第1集」(1597年出版)に収められたこの曲は、強弱法を用いた最初期の作品とみられており、2つのグループの掛け合いと合奏で強弱や陰影が表現される。ちなみにPJBEは、古楽系の大指揮者ジョン・エリオット・ガーディナーの編曲版で演奏(録音)していた。本日はこの曲のみ八重奏。

M.ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

オリジナルは、フランス近代音楽の立役者モーリス・ラヴェル(1875−1937)が、1899年に作曲したピアノ曲。当時交流があったポリニャック公妃の依頼で書かれ、1910年には管弦楽版も作られた。古い宮廷舞曲のスタイルを用いた音楽は、高雅な趣きが支配しているが、タイトル自体に深い意味はなく、フランス語の韻を踏んだ語調のよさに拠るという。冒頭でホルンが奏でる典雅な主題に、複数の優しい主題が続く、甘美で胸に染み入る逸品。

J.ケッツァー：ブラス・シンフォニー

ヤン・ケッツァー（1911−2006。クーツィールとも表記）は、オランダの作曲家、指揮者。作品は3つの交響曲をはじめ様々なジャンルに及んでいるが、やはりブラス音楽の演奏機会が多い。中でも「小組曲」は、フィリップ・ジョーンズが感銘を受け、それをきっかけにアンサンブルを組んだともいわれる重要作。また「子供のサーカス」も広く親しまれている。

本作は、1979年PJBEのために書かれた、急-緩-急の堅牢な「交響曲」。こうした本格作が少ないブラス・アンサンブルにとって貴重なレパートリーとなっている。曲は、シリアスさと若干の遊び心をもった濃密な音楽。

ファンファーレに始まり、短い動機が緻密に発展するアレグロ、幻想味が漂い、グリッサンドやミュートの効果も絶妙なラルゲット、細かな動きが軽快に続くロンド、プレストの3楽章からなる。

P.デュカス：舞踏劇「ラ・ペリ」より“ファンファーレ”

「魔法使いの弟子」でおなじみの近代フランスの作曲家ポール・デュカス（1865−1935）が、1910年に作曲した舞踏劇の開幕用ファンファーレ。ちなみに本編は、不老不死の花を求める王子イスカンダルと、その花を持つ妖精ペリにまつわる物語である。曲は、オーケストラの金管セクションの通常編成をオリジナルとする壮麗なナンバー。コンサートや式典でしばしば単独演奏されている。

J.パーカー：組曲「ニューヨークのロンドンっ子」より

ジム・パーカー（1934−2005）は、イギリスの作曲家。映画やテレビ用の音楽を200以上作曲し、ナッシュ・アンサンブル、ヒリヤード・アンサンブル等のためにコンサート用の作品も書いている。

PJBEのアメリカ・ツアーのために作曲された（1985年に録音）本作は、ガーシュウィンの「パリのアメリカ人」を意識したタイトル通り、ニューヨークの名所の印象をロンドンっ子の目線で描いた、ジャズ風の愉しい音楽。なお「グランド・セントラル駅」はオリジナルでは第3曲だが、PJBEは蒸気機関車が発車する内容に即して1曲目に置いていた。

本日は、全5曲の内、スウィング調の「ハーレム街の響き」、ブルース風の「クライスラー・ビル」、出発した列車が疾走する「グランド・セントラル駅」の3曲が演奏される。

C.ヘイゼル：3匹の猫〜ブラック・サム／バーリッジ／ミスター・ジャムス もう1匹の猫〜クラーケン

クリス・ヘイゼル（1948−）は、デッカ・レーベルの録音プロデューサーを25年に亘って務め、PJBEをはじめ多くの演奏家のアルバムを手がけた人物。彼の飼い猫（当時14匹飼っていたという）の名をもつこの4曲=「猫の組曲」は、PJBEの依嘱による（1977年に録音）お洒落な音楽で、彼らのアンコール・ピースとして人気を呼んだ。

Program Notes

ブラック・サム：　ヘイゼル自身の解説（以下同）によると「雨の降る寒い日曜の朝にやってきた猫」で、「のどを鳴らす声がゴスペルシンガーの賛美歌を思い起こさせた」。まさにゴスペル調の和声的な音楽。

バージッジ：　「4匹の中で最後にやってきた野良猫」。タイトルは「彼がよく潜んでいた植物の名」で、「家の中や庭を元気一杯に駆け回っていたが、車に轢かれて短い寿命を終えた」。ジャズ風の力強い音楽。

ミスター・ジャムス：「痩せこけた迷い猫で、最も心優しかった」。柔和で美しい音楽。

クラーケン：　「最初にやってきた小さな牝の捨て猫」で、「冗談半分に伝説の海の怪物の名を付けた」が、「最も長生きで20歳になり、自分がボスであること誇示した」。そして「斑点のある尻尾が特徴だったので、曲にはラテン語の語源が“尻尾”であるフーガを取り入れた」。堂々たる中にも飄々とした音楽。

J.カンダー：ミュージカル「シカゴ」より

「シカゴ」は、伝説的な振付師＆演出家ボブ・フォッシーが手がけ、1975年にブロードウェイで初演されたミュージカル。1996年の再演でロングランを記録し、日本など各国でも上演されている。2002年には映画化され、アカデミー作品賞を獲得した。音楽を担当したジョン・カンダー（1927−）は、アメリカのミュージカル作曲家。作詞のフレッド・エッブとのコンビで、「キャバレー」「ニューヨーク・ニューヨーク」などの名作を生み出しており、「シカゴ」も同様の代表作である。

1920年代のシカゴを舞台にした物語は、スターを夢見るロキシーが、刑務所で憧れのスター、ヴェルマと巡り合ったのを契機に、スキャンダル等を経て上り詰める様子が、風刺を交えながら描かれる。時代を反映した音楽は、全体にトランペットをはじめ金管楽器が活躍するが、今回は中でもブラスに合ったゴキゲンなナンバーが選ばれている。

華やかな「序曲」、ヴェルマが歌う代表曲「オール・ザット・ジャズ」、ロキシーがスターになった姿を夢見る「ロキシー」、女看守長が袖の下の有効性を歌う「ホエン・ユーアー・グッド・トゥ・ママ」、記者会見で話をでっち上げる「ウィ・ボース・リーチド・フォア・ザ・ガン」が続く。